

特集・〈中央〉から離れて

# 沖縄の心は何の色？

もう他に追い求めることはせずに、ぼく自身が〈やさしさ〉になるような生を創り出していこう。それは、ぼく自身が、今の場で生き抜くこと、闘いぬくことだ

中 村 豊



〈やさしさ〉を求めて

やはり碧かった——沖縄の海と空は。どこまでもどこまでも。ぼくはその中へ呑みこまれていった。

ぼくは、一九七一年十月、二度目の沖縄へ向かった。そこで耳にしたものは、言葉にもあらわせない美しい響きだった。それは、そこに生きる人々の〈やさしさ〉と、その自然がもつ崇高さとが、みごとに調和した響きだった。そして、それは、ぼくの眼前に〈碧さ〉としてせまってきた。

確かに変わっていた——沖縄も、ぼくも。二年余り前、はじめて沖縄へ行った時のぼくは、〈沖縄問題〉を自分のこの手でじかに触れてみたいと気負っていた。そして、緊張しつつ、米軍基地に近づき、アメリカの臭いをかいだりした。〈観光旅行〉に似たくない。

〈やじ馬〉になりたくない。沖縄人民と連帯しなくっちゃ……。〈沖縄闘争勝利〉……。

〈ぬすつとネコ〉のようにヒリヒリとアメリカを意識していた。その時のぼくの神経では、「沖縄の空と海は何の色？」なんて感じる余裕はとてなかつた。海水浴場で、外人専用区と日本人専用区とを、はっきり差別され、

米兵から屈辱的な罵声を浴びせられたことが忘れられなかった。その時泳いだ浜は真黄色のドロ沼のようで、一泳ぎすると、まるで塗りかけた土壁の中で昼寝してきたかのように、肌が汚れた。

今回の旅の目的は、前回のそれとは、全く違って、**「人間のやさしさ」**との出会いを追い求めることであり、ぼくたち自身の内にひそむ**「やさしさ」**を発見し直すことであった。それをぼくの旅のテーマにできるほど、ぼく自身が二年の間に変化していた。

一昨年あたりから、ぼくは**「共同体」**に興味をもち始め、「山岸会」や**「共同性発見集団」**などのグループに入入りしていた。そもそも人間には**「共同性」**がそなわっており、その点で、本来人間は一つではないかと考えていた。また、その**「共同性」**をスムーズに潤滑させるか否かは、その**「人間関係」**にあり、**「人間関係」**が社会のしくみも規定していくものではないかとも考えていた。

そんな時、野本三吉という人を知った。彼はそれまでにはぼくが出会ったことのないような世界をもっている人だった。その顔に「やさしささん」と書いてあるような……。彼の著書**「不可視のコミュニオン」**には、ぼくの内

にありながら表現しきれない多くのことが、やさしく簡単なことばで書き表わされていた。彼は幾度か沖繩へいつている。彼の沖繩報告を耳にする度に、ぼくの心は沖繩に向くのだった。彼の口からはいつも、沖繩の**「やさしさ」**とそこにある**「人間関係の原型」**についての話がこぼれてきた。

そして、一九七一年十月下旬、東京もすでに肌寒くなり始めたある日、「不可視のコミュニオン」をリユックにしたのばせて、友人にも知らせず、晴海埠頭から本土を脱出したのだった。

### 八方ふさがり

船に乗った時から**「沖繩のやさしさ」**は感じられた。船の中をどきまわって調子にのつていると、いろんな人が声をかけてきた。船旅というのは、限られた空間の中で限られた時間を共に呼吸することが強いられる。そうした状況の中では、ごく自然に無意識に人々の心と心の連帯がつけられていく。コミュニオンを創り出す人々の心の構造に近いものが、ひとりひとりの中に生まれてくる。——ほろ酔いかげんで蛇味線を弾いてくれたおじさん。「那覇に着いたら市内を案内しましょう」と

約束してくれた娘さん。被爆者のご主人もつた四十すぎのおばさんは、戦争体験や、米軍基地の話を通して、沖繩の心をやさしくそれでいてきびしく語ってくれた。みんなそれぞれ東京で用事を済ませて故郷沖繩に帰る人たちだった。また、デンマーク放送の仕事で日本本土に一年間滞在していたという、キーさんとオレさんの夫婦とも、コミュニオンについて語り合ったりした。

ぼくは、沖繩に着いたらどんな人間関係が新たに生まれ発展していくのかと、楽しい想像をめぐらしていた。沖繩本島に着いてから数日して、八重山諸島、石垣島へ向かう船に乗った。石垣島からさらに小舟で九十分、竹富島に渡った。周囲九キロメートルの小さな島で、ここに「種子取祭」という翌年の豊作を祈る祭りがあるという。ぼくは、祭りの原型について探り出したいという魂胆もあって、かなり期待して島に上陸したが、台風とひどい早魘があったという事で行事は中止となり、祭式だけで幕が閉じられた。

沖繩の人々のやさしさとは、この島でも、いたるところで出会うことができた。それはこの紙面に書き綴れないほどだ。彼らのやさ

しさと人の良さは、ぼくのような都会的に合理的に育ったものには、はじめは奇異な感じすら与えた。だが、彼らの心は、誰に対してもほんとうに開かれているようだった。どれだけ抑圧され疎外されてきたか測り知れないのに、微笑を忘れない。ぼくたちは、言葉でしか沖繩の解放を語れない、むしろ加害者の存在であるのに、彼らは温かく迎えてもてなしてくれた。ぼくはそれに甘え、四・五日そこに居すわった。本土から放浪してくる若者たちを、ここはトリコにするところのようだった。土地を買い、家やアトリエまで自分で建てているグループにも出会った。

しかし、この居こち良さに溺れ、酔っている自分に気づいた時、なにか自分が空しくなっていくのを覚えた。歴史を築き、支えた人々によって創りあげられたその**「やさしさ」**にぼくが片想いをしていただけのように思えた。彼らは、ただそこで生きるべく生産活動をし、その日常性になっただけにすぎない。ところが、そこから自然に湧きでてくる彼らの**「やさしさ」**に比して、ぼくにはそれを発見する鋭さも、それを支える底力も、生産手段を自らもつ力強さももつことができず、傍観するしかできない**「第三者」**であっ

た。人々が、温かくもてなしてくれればくれるほど、ぼくは、たまらなくわびしくみじめな思いにおち入っていった。

その後、宮古島へ渡った。「不可視のコミュニオン」を読み直してみた。ぼくのこの混乱を野本氏が救ってくれるかもしれないというかすかな期待をいだいて、彼の宮古での体験を追ってみた。「ちくしょう！ 野本のヤツ、ひでえ野郎だ。沖繩のやさしさについて書いてはあるが、それでどうすりやいいのかわも書いてねえじゃないか！」

ぼくは四面楚歌のような心境になり、八方ふさがりですることもできず、メチャクチャに八ツあたりした。その晩は、宮古島の海岸にテントを張り、宮古の高校生と遅くまで泡盛を飲んで冷えこむ夜をしのいだ。

### 日本式人民公社？—DIC

空中分解を起こしそうな頭をかかえたぼくは、とりあえず**「沖繩のやさしさ」**にとらわれた自分を解放しようと、離島を後にして、本島へ向かった。翌朝、那覇の泊港に着いた時は、何かホツとする思いだった。その足でそのまま、本島最北端の奥部落へいった。

そこでは、一年ほど前から、東京の学生がきて、**「根拠地」**を創っていた。「DIC」(Distraction Is Construction)というその運動は、一つの**「世なおし」**運動であり、東大闘争を経た六九年に「解放大学」の活動があったが、その結果、生まれるべくして生まれたものだ。

東京を発つ前日、この運動の代表者のH氏に会って、世なおしの話を少しだけ聞いた。に、具体的にどんな生活をしているのか、どのような新しい人間関係が生まれているのか、興味があった。

彼らは、「自力更生」をスローガンに僻地の農村に入り、そこから日本の人民公社を創出するのだという信念をもって生きぬいてきた。総勢二十数名。山間の全く何も無いスキ原を耕やして畑をつくり、ヤギをようやく買いいれ、ヤギのための小屋もなんとか建てているところだった。破産しつづいた現代の医学に対し、彼らは薬草を研究し、ハリ、指圧を学ぶのだった。インテリや専門家を生み出す体制を否定し、自身の中に全体性をとりもどそうと、そのために最も疎外された人々の中へあえて自己を投入し、その人々の中にあるほんとうのものを学ぼうとしていた。抑

圧された人々からしか、学ぶことはもうないのだというようなことも言っていた。夜は、毛沢東についての学習もしていた。ひとりひとりの顔は生き生きと輝やっていた。革命運動を言葉だけで吐くのとはい、自らその手に生産手段をもち、理論と実践とを結合させるために検討の時間も惜しまない彼らの「自力更生」の底力に、ぼくはひかれた。寝る時間があるのかと考えてしまうほど、よく働きよく勉強していた。そして、ひとつ問題が起これば、それを全体の問題として、とことん考え、どこから間違っていたかを全員で批判検討しながら、本質を把握する努力を忘れていないように感じられた。「DIG式研鑽」とそれはいうようであるが、ヤマギシズムの研鑽方式によく似ている。

しかし、彼らは内部的にも対社会的にも、多くの問題をかかえているようでもあった。特に、部落との関係は難かしいようで、「親捨てて、学校をやめて……」というような書き出しのビラが配布されたりしたこともあって、DIGに対する部落の人々の疑惑、不信感は深いようであった。血縁関係によって共同体が成り立っているような部落の生活にとり、部落を分裂させるようなことを吐く分

めてであったとか、きいた。彼女は、農村婦人の問題を通して闘おうとしていた。  
一メートル九十センチ位ある巨体のへいちゃん、は、会う早々、辛辣な表現で、DIG批判をして、お前達は何しにここへ来たという調子でせまってきた。アメリカに三十五年、ブラジルに十五年生活したへいちゃん、の口からは、英語やスペイン語やポルトガル語が日本語にまざってポイポイとびでてきた。数年前沖繩に帰ってきて、一人でデークマタ農場を切り開いたそうで、地元が山林開発に力を入れ始めたのを契機に、へいちゃんも一年前山を買ったという。十万坪もあるだろう。一年間で、六万坪近く開墾してしまったらしい。山奥で、水も電気もない生活である。ランプと、川の水で、食・住は成りたっている。

「おまえら何者だ！」DIGからの紹介で云々、沖繩のやさしさ云々いっている、「なに言っただい！おまえの事を聞いてんだよ。」と怒鳴る。刑事の訊問のような追及を受け、ぼくはくるべきじゃなかったと、さすがうつむきかげん。でる声でもなくなった。でも、へいちゃんのこれ以上の辛辣さはないらしいの辛辣なことは、妙にやさしい音に聞

子は脅威的存在なのであろうか。とにかく、何をしにこの沖繩の僻地まで、前途有望の若い青年たちがやってきたのか理解できない部落の人々は、彼らを選び、身を守ろうとしていた。奥部落は共産部落といわれたことがあるほど結束の固い部落だけに、その排他性も激しいようだった。そのような中での援農はむずかしく、孤立しがちで、生活もかなり苦しいようだった。食生活も困難なようだ。栄養失調気味の体を、見失わないう目標と、それにかける若さと情熱で支えているようだ。ぼくは彼らと共に鎌を手にしながら、彼や彼女の夢とその実践をきかせてもらった。しかし、ぼくが訪ねた時は、ちょうど内部的な問題が噴きでた時で、研鑽会を重ねていたので、多くを語りあう余裕もなく早々にひきあげた。そして彼らが紹介してくれたデークマタ農場に立ち寄ることにしたのだ。

## デークマタ農場の大人物

「立ち寄る」といっても、鉄道のない沖繩では、車を頼るしかない。その車が少ないこの地域では、山の切りくずしや道路工事をするためにたまに通りかかる車を待ってヒッチしなければ、南下することもできなかった。

こえた。  
「向かいのあの山に、ミカン園があるから見てきなよ！メシはそれからにしよう。」  
あたりはすっかり暗くなっていた。千葉さんという二十代の若い青年が、トラックに乗せてくれて、谷を越えた向こうの山まで連れていってくれた。ハブノイローゼ気味のぼくは、彼の後に抱きつくようにピッタリくっついて、ミカン園の草むら歩いた。地元の子年達が、ブルドーザー十七台を投入して開墾中の広大なミカン園だった。これまでの沖繩の食料品はほとんど輸入に頼ってきたが、これからは少なくとも島自体で自給自足し、輸出までもっていけるくらいでなければ……と、本土にまで研修に行ったことのある千葉さんは、沖繩の農業のこれからのあり方について語ってくれた。

へいちゃんは話が好きだった。ミカン園から戻ると、一語に旅しているIさんと山岸会についての話をしていた。ぼくも当然ながら、まきこまれることになった。へいちゃん、は、世界共産党員としての誇りが強い。あらゆる世界情勢や、イデオロギーを網羅している。その点、日本本土の方が島国で、閉鎖的で、沖繩の方が情報的にも開かれていて、世

デークマタ農場は、数十キロあるリュックを背負っている、へいちゃん、ことのできるころではなかった。ぼくがたどりついた時は、もう夕方近かった。最もハブが多い地方だと聞かされビクビクしながら、実際に車でひき殺されたハブを横目でみながら、もうひき返そうかな、などと思っているうちに、農場の入口に着いた。そこから、また一山、二山越えた山頂に農場はあった。

地形的にも精神的にも、デークマタ農場は気軽にへいちゃん、ことのできる農場ではなかった。DIGの紹介をもって気軽によったぼくは、へいちゃん、だのへいちゃん、だの間の関係だのという幻想をここでみんな粉碎されることになったのだ。が同時にそれは、へいちゃん、ことのできる人間の未知の可能性を教えてくれたことでもあった。

農場にたどりつき、一息ついてしばらくすると、巨人のような老体がぼくの前に押し現われ、声をかけてきた。この農場の主人、吉本重喜（七十四才）さんだった。その横に山里八重子（五十才くらい）さんが立っていた。彼女は、琉球大学の教授夫人で、教授の夫君に造反を起こして家をでたとか、一年前この農場を始めた時クワを手にしたのがはじ

界性を有しているように感じられた。特に、へいちゃんには、理論的にも実践的にもかなわなかった。本土にもこれだけの大人物が存在するかどうか疑問をもちたくなるだけの人である。山岸会をウロウロするぼくにとってもなかなかつかめないヤマギシズムの話をせまられ、適確な説明もむずかしかった。  
「思想でもなければ、宗教でもないし、右寄りな考え方でありながら左寄りでもあるし、原始共産制のようなふうでも……」など。  
その時、へいちゃんの雷のような声がドカーンと、落ちた。  
「なんじやい、おまえら幽霊か？ワハハハ、幽霊がデークマタ農場へ歩いてきた。ワハハハ……」  
もう後何も言えなかった。聞かされる一方だった。（このジジイ、タダモノじゃないぞ。オヌシ、デキルナ！）

## ワンダフル沖繩づくり

おじいちゃんの略歴を紹介してみよう。二十才をすぎたアメリカへ移民、庭師として活躍。ワーナーブラザーズ映画の社長など、有名人の庭を数多く造園（アメリカの庭というのは、山を三つ四つもち、それを庭

りましよう。」

## 働くよろこび

大地に足を踏んばって生きてきたおじいちゃんからは、ぼくなんか幽霊にしか見えないのは当然だ。じいちゃんは言った。

「失敗や矛盾を恐れるなよ。結果がどうあろうと言葉で解決しようとするな。ただ実践のみが、解決を創り出すんだ。」

「……じいちゃんもう許してくれよ。わかったよ。」とぼくは心の中で半そそをかいていた。

デークマタの朝は早い。それでも、夜遅くまで、沖繩のこれからのこと、本土復帰のこと、世界の流れについて、多くの思想や政党について等、じいちゃんは語りかけてきた。

ぼくはじっときいて、たまにはうなずいてみる。ことしかできなかった。自己表現するすべを失なってしまうていた。

「おまえ、いつ帰るんだ。」

「明日の朝出発して、ゼネストの集会に行こうと思っっています。」

「ゼネストはあさってじゃ。ワシらも参加するから、それまでここで働いていけ！」

「……」

「明日の朝は五時起床だ、いいな。」

かつて細々と生活している現状で、強いくきどおりを感じます。

そして都市、農村生活を問わず、輸入物資に依存している生活を送っている現実には暗然としたものを感じます。この状態の中で、

大宜味村が山地を開放して分譲する計画をはじめた時、私はこれまでの沖繩における農業形態のあり方を改めて、農業でも生活できる状態をつくりあげたい希望と若者達を農村に

ひきとめたい希望とをもって……（中略）……沖繩の風土的条件は世界でもすばらしい地位にあり、亜熱帯果樹及植物の栽培に最適の場所です。こうした気候的条件の中で世界の

亜熱帯地方に於て可能な果樹及植物を沖繩に集め、小さい島国でも（ココニ）自分達で生活できる沖繩をつくり、そして住みよい平和な沖繩にしたいという希望を持っています。……（中略）……農業を見捨てて、都市に流れていく農村民のくいとめ策として、ぜひ実験

農場のもつ役割を成功させたい。そして平和に生活できる沖繩の基礎作りとしての基盤を、未開発の無限の山地をもつ北部に新しい農村をつくることによって可能にしたい。——目的達成のために国籍、人種の別なく熱意ある協力によって住みよい沖繩ワンダフルをつく

かついで細々と生活している現状で、強いくきどおりを感じます。

そして都市、農村生活を問わず、輸入物資に依存している生活を送っている現実には暗然としたものを感じます。この状態の中で、

大宜味村が山地を開放して分譲する計画をはじめた時、私はこれまでの沖繩における農業形態のあり方を改めて、農業でも生活できる状態をつくりあげたい希望と若者達を農村に

ひきとめたい希望とをもって……（中略）……沖繩の風土的条件は世界でもすばらしい地位にあり、亜熱帯果樹及植物の栽培に最適の場所です。こうした気候的条件の中で世界の

亜熱帯地方に於て可能な果樹及植物を沖繩に集め、小さい島国でも（ココニ）自分達で生活できる沖繩をつくり、そして住みよい平和な沖繩にしたいという希望を持っています。……（中略）……農業を見捨てて、都市に流れていく農村民のくいとめ策として、ぜひ実験

農場のもつ役割を成功させたい。そして平和に生活できる沖繩の基礎作りとしての基盤を、未開発の無限の山地をもつ北部に新しい農村をつくることによって可能にしたい。——目的達成のために国籍、人種の別なく熱意ある協力によって住みよい沖繩ワンダフルをつく

六時半、一日の仕事が開始された。灌木倒しと根っこ掘り。二メートル以上あるボールをふりまわし、否、ふりまわされたと言った方が適切かもしれない。木を根こそぎ引き抜いていく作業である。

「ノーッ！ なにやってんだ。槍を突くようにしてエイ！ ヤアッ！ と。ユー、ノー？」

「アイ、シー」

ぼくはこの国にいいのか混乱する。作業中、「ノーッ！」を何十べんも連発された。

じいちゃんは、亜熱帯地方の植物、果樹のほとんどに手をかける用意をしており、アメリカからは、さし木用に木を送らせ、ブラジルからはコーヒーを送らせたりしていた。おじいちゃんの中では、（ワンダフル沖繩）のイメージが、もうできあがっていて、それを着々と実行しているようだった。その構想の規模はものすごい。

山里さんがお茶を入れてきてくれて赤い土の上に腰を下ろした時は、ぼくの手は、豆が破れ、虫にさされたり、傷だらけだった。おやつのお砂糖の甘さが、ぼくを安らかにしてくれた。

じいちゃんは一人で、じつと土をみつめて、なにか物思いにふけていた。山里さんの解

にするのだという）する。第二次大戦中、反ヒットラー、反ムッソリーニ、反ヒロヒトをスローガンに立つ。沖繩の友人を通して、日本の軍部の情報入手したりした。「個人ですらこれだけの情報を得ることができているから、軍はもっと多くの情報をにぎっているのだから。すべて公表せよ。」と米軍部に手紙を書いたとか。彼はブラックリストにのり、戦後、有害外人追放令がでたとき、国外追放され（全米で四十三名、日本人では一人）、沖繩に帰ったが、米民政府が入国拒否。ブラジルに行き十五年間生活して、三年前沖繩に五十年ぶりの帰国をする。現在単身で、（ワンダフル沖繩）作りに専念している。

「（ワンダフル沖繩）にしたい希望者へのアピール」というパンフレットに、じいちゃんのデークマタ農場を始めた趣旨は表わされている。

「五十一年の外国生活を送って郷里沖繩に帰ってきた時、私の目に映る空の青さ、海の美しさ、気候の素晴らしさに私はあらためて自分の郷里を見返す気持ちになりました。そして、実際にこの島に生活して感じたことは、若者が農村を離れ、都市に流れ出ていき昔ながらの農業形態の中で老人達が鋤を持ち、カゴを

結局、もう一日残ることにいつのまにか決まって、寝袋にはくは頭をつつこんだ。

翌朝、じいちゃんは約束を破った。四時頃一人で目をさますと、ベットの上がらぶつぶつ言いだし、語りかけてきた。

「どうも、夕べの幽霊の話が気になる、山岸君の話をしようじゃないか。」

（またか……）英語がとびだしてくる一晩中の寝言に、それなくても休めなかつたのに、起こされてぼくは、眠いやら頭にくるやら……朝っぱらから、じいちゃんは二時間ほど一気にしゃべりまくった。そしてやつと朝の食事にありつくつと、

「おい、アーミーブーツはいて、ボールをもつてこい。」



たッ……)

ドラムカンに貯えられた風呂用の水を必死になって涌かす。調子にのってマキを入れすぎて、沸騰させてしまった。何をやってもうれしかった。おかしかった。

食事をすませ、じいちゃんが初めてやさしく声をかけてくれた。

「どうだ、しばらくここにいたら、一年もいらないとほんとうの良さはつかめん。ダメなら一月でもいい。一週間でもいい。」

ぼくは、大学卒業のために、今どうしても帰って卒論を書かねばならないからなどと、言いわけをして逃げた。

じいちゃんはその晩、「明日は闘争日だから」を連発して、早く寝てくれた。山里さんは、農村婦人の立場から、名護の集会でアピールすること、その準備にとりかかる。ぼくは寝袋に入ったとたん、もう意識をなくしていた。

### ぼく自身が創りだそう

十一月十日、ゼネストは、沖繩全島あげて闘いぬかれた。ゼネストと言っても、それを闘う沖繩の人々にとって、それはそれぞれが日々の仕事に就くように、闘いそのものが日

常的な生活の一部であるようだった。

朝五時、まだ夜は明けきらない。沖繩といえども北部山頂では冷えこみがきびしい。最後に、じいちゃんが、「おまえのもっている本に署名して、テークマタに置いていけ。ここに将来ライブラリーをつくるから」といった。山岸会の説明をするために、ぼくは水津彦雄著『日本のユートピア』を前日からちらつかせていたのだった。気が進まなかったが、じいちゃんが強く要請するので、置いていくことにした。

「夜明けは近い！ゼネストの日の未明に——豊 七一、十一、十」

それから、じいちゃんは、おみやげにと言ったソテツの実をくれた。山里さんはソテツの実に托された「沖繩の心」を語ってくれた。「どんなに大和人に抑圧され苦しめられたか。食料が何もなくなくなった時、みんなこのソテツの実を食べて飢えをしのいだのよ。沖繩を救ったのはこのソテツなの。ソテツはどこにでも育つわ。だからあなたに「沖繩の心」をわかってほしいと、そして、どこにでも育つ強い人間になってほしいという祈りをこめて、じいちゃんはプレゼントするのよ。」

ゼネストで交通機関はストップ、全員トラ

ックにのりこんだ。トラックは、一路名護町へむかった。そこで北部の統一集会が行なわれる。ぼくたちは、じいちゃんと名護で別かれた。じいちゃんは赤いハチマキをしめ、大きな手でぼくたちの手をきつく握りしめた。じいちゃんの手は温かった。

「いいか、幽霊になるなよ。湯ドーフになるなよ！地に足をしっかりとつけてな。行け！」

じいちゃんが那覇行きの手配してくれて、ぼくたちはそれにのった。

じいちゃんと別れたが、ぼくは、はつきりじいちゃんと出会っていた。別れる時、そのことを意識していた。ぼくはじいちゃんと空間的には離れたけれど、ぼくの中では、じいちゃんが激しく燃え、叱咤激励しているのだった。

「本当に沖繩のことを考えるならば、君たちは君たちの場所を闘ってくれ、生きてくれ。その時、はじめて、沖繩と連帯できるのだ。支援と言って沖繩にいて、フラフラされたら迷惑だ。地に足のついてない運動なんか、聞えない。地に足をつけるよ。」

やさしさとの出会いを求めて放浪したぼく

が、行き着いた所は予定もしなかったこのテークマタ農場だった。真正面から、ケンカ腰に体当たりしてきたじいちゃんに、ぼくは、ほんとに人間の肌の温かさ——やさしさ——愛——を教えられた。もう追いかけることはしないで、ぼく自身が「やさしさ」になるような生を、創り出していかなばならない。それは、ぼく自身が、今与えられた場所できぬくこと。闘いぬくことだと思う。それができた時、はじめて沖繩の人々、そして世界の人民と連帯できるのだと思う。まず、ぼく自身、ここに腰をすえ、自ら生産手段をもち、自分で食っているだけの用意から始めねばならないだろう。

テークマタは、ぼくに大きかった。テークマタを通さないで、ぼくの沖繩との出会いは、なかったと言っても過言ではない。

米軍基地沖繩を取材した写真集、書籍は、きょうも書店に飾られているが、この田舎の山奥に「ワンタフル沖繩」創りに余生をかけ、鉄をもつて闘っているおじいちゃん存在を、だれが知っているのだろうか。

## 真の出会いへの出立

### 第九回キブツ研修生A合宿

昨年第九回キブツ研修生を募集したところ、例年に倍する一五〇名の正式申し込みを受け、申し込んだ当人と直接会って話し、納得の上で一年延期したり単身で行くつもりでもらうことになり、最終的には九一名が数ヶ所のキブツでグループ研修することになった。かつてない大人数のため、国内合宿は二度に分けて代々木の青少年総合センターを使うことになり、初めとしてA合宿が昨一月一八日―二三日にわたって行なわれた。

三一名(男一四、女一七)の平均年齢二三才の若者たちにとっても、初対面は苦しかった。固さがほぐれて、なんとか相手を直視できるようになるには三日以上の日時を要した。特に、センターの側の規則があり、朝のつどい、夕べのつどい、起床、消灯の時間が定められてあったので、合宿の

スケジュールもそれに合わせられ、もっと自由に夜ふけまで語り合える雰囲気を持っていた人にとっては、物足りないものであった。

しかし反面、今どうにもならぬ外部からの規制の中で、おたがいが残された時間と空間をいかに使ってゆかかを見るのは、非常に興味深いことだった。キブツに行っても、各人がなにかを確実に掴むか否かは、平凡に見えるいつときいつときの充実のさせ方にあるからである。これら、わずらわしい規制の中で、よりはつきりと各人のある一面があらわにされたことは否定できない。多分これは、望んでいたような露われ方ではなかったに違いない。が、長く生活する中ではあらわれて来ざるを得ない一面である。

半年間とともに暮らすキブツ・グループ研修は、言うならば新たな出会いの連続である。キブツとの、外国人との、風光との肉休労働との、そして新たな日本の仲間との。その出会いへの出立が合宿であったといえよう。